「鹿児島の近現代」連続トークイベント

「鹿児島の近現代」連続トークイベント「＃鹿児島の女性 03」実施報告

高等教育研究開発センター　准教授　出口 英樹

法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターは、令和6年3月3日に種子島の西之表市民会館にて連続トークイベント「＃鹿児島の女性」の第03回を開催いたしました。テーマは「鹿児島の女性と教育」です。当日は西之表市民の皆さまの他、八板俊輔西之表市長にもご参加いただきました。

鹿児島には男尊女卑の風土が残っていると言われます。そのことが影響しているのか、今日においても、例えば女子の4年制大学進学率は鹿児島県が何年もずっと全国最下位という状況が続いています。「女の子だから大学に行かなくてもいい（むしろ行かないほうが幸せになれる）」、「お姉ちゃんは地元の短大で我慢して弟は東京の4年制大学に」というような話は今でも少なからず見聞されます。そして、そのような傾向はもしかしたら離島において顕著であるかもしれません。

このような鹿児島の現状と筆者（話し手）の課題意識を踏まえ、桃の節句である3月3日に（それは半ばたまたまですが）種子島において「鹿児島の女性と教育」について考えるイベントを開催しました。「鹿児島の女性と教育」について、歴史的経緯を概観しながら、上記のような現在の女性と高等教育（＝大学）について参加者とともに考えるようなセッションを目指しました。

このような鹿児島における女子教育の言わば後進性に言及しつつ、「実は日本で最初の女子大生は鹿児島の女性である」という話を紹介しました。戦前の学校教育制度において大学は基本的には男子だけのものでした。そのような時代背景があったにもかかわらず、鹿児島出身の丹下梅子さん（1873年－1955年）をはじめ3人の女性が初の女子大学生として東北帝国大学（現在の東北大学）に入学したのです（丹下さんはその後、アメリカに渡り博士号も取得します）。

つまり、鹿児島には女子教育のポテンシャルが眠っているはずである、ということです。また、筆者らは「鹿児島の近現代」教育研究センターの地域マネジメント事業プロジェクトの一環として種子島高等学校郷土研究部について調査していますが、その部員の多く（創部の頃は8割以上）が女子生徒であったことにも注目しました。

参加者からは自身の体験を踏まえたコメントや現状に対する提言などが寄せられ、少人数ながら大いに盛り上がりました。このイベントが種子島の皆さん、ひいては鹿児島の女性と教育という問題を考える一助になれば幸甚です。